

「山月記」の伏流水

—虎と人間のゆくえ—

中 田 睦 美*

Underground Waters of “SANGETSU-KI”

Possibilities of the Reading ‘The tiger or human’

(NAKATA Mutsumi)

1. 「山月記」のブラックボックス

高校国語の定番教材であり、教科書採録数が最も多い^(注1) 中島敦の「山月記」には実に多くの言及がある。たとえば、五年前の春(2010・4)、必要があって「国文学研究資料館」の「国文学論文目録データベース」を検索してみると、253件がヒットした。リストアップされていない「山月記」論も管見に入っており、作品発表前後の回想類や同時代評などもリスト外で、この五年間にも関連文献は確実に増加している。事実、本年(2015年6月)の上記データベースでは310件がアップされている。したがって、推測にすぎないが、「山月記」の関連文献は少なくとも500点に迫るのではあるまいか。また、近刊の佐野幹著『「山月記」はなぜ国民教材となったのか』(大修館書店、平25・8)は、書名のとおり一冊全体が「山月記」関連の言及で埋められている。「山月記」が国民教材となってゆく過程を、文部省(現・文部科学省)の指針や国語教育界の動向、社会的背景やそのイデオロギー的感化、課題学習という教育実践やその問題点、またその教授法や解釈の変遷など、多くのデータを駆使して定番教材の〈底流〉を多角的に論じている。巻末の付録には「学習の手引き」の調査結果による設問や解答例に対する解説も付され、「授業実践のヒント20選」なども見える。本書は教育現場に立つ国語教師が文学教材である「山月記」の背景に迫った最も精細なアプローチのひとつといえる。

その佐野氏がまず注目したのは、「山月記」を「文学作品における形象の問題」として捉えた増淵恒吉の授業実践報告^(注2)で、それは以下の場面をめぐってであった。

長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一讀して作者の才の非凡を思ほせるものばかりで

* 近畿大学教職教育部准教授

[キーワード] 山月記、教育現場、抑圧的存在、虎、人間

ある。しかし、哀愼は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この俣では、第一流の作品となるのには、何處か（非常に微妙な點に於て）缺ける所があるのではないかと。

「山月記」のプロットをひとくちにいえば、詩人として世に立つことを夢見た男が夢に敗れ、虎に変身したというものである。増淵氏の実践報告は、虎となった主人公の李徴が、勅命を奉じて旅する旧友の哀愼と再会し、「すっかり人間でなくなつて了ふ前」の最後の「頼」みとして、自分が「産を破り心を狂はせて迄」「執着した」詩作のうち「今も尚記誦せる」詩編を「一部なりとも後代に博へ」たい、と申し出る。哀愼は旧友の願いを容れ、部下に詩編を書き取らせ、その詩に対して上記のような感懐をもらす。

増淵氏は、この箇所から『『微妙な点』とは、たとえばどんなことか』という課題（設問）を生徒に与え、次の三種の解答例を提示する。

- (1) 人間性に欠けるところがあった
- (2) 深い精神の持ち方が欠けていた
- (3) 現実の生活と深いかわりあいを持って、人生を生き抜く誠実さに欠けるところがあった

佐野氏は、増淵氏のこうした「課題学習」方式による実践報告について、佐藤泉の仕事^(注3)などを参照しつつ、なかでも(1)の解答「人間性の欠如」説が、戦後民主主義のスローガンとなった「人間性」の「解放」や「尊重」の影響下、その社会的要請に沿う解答として定着・再生産されていった過程をあとづける。問題は教育現場の〈読解〉のみにとどまらない。この「微妙な点」で「欠ける所」は、中島文学研究を専門とする論者たちの間でも〈作品解釈〉の重要なポイントの一つとされている。

さらに、これと並んでもう一カ所、「山月記」の〈読解〉や〈解釈〉において問題とされる重要なポイントがある。それは李徴が「なぜ人間から虎に変身したのか」という問いである。教科書中の「学習の手引き」や設問の多くも「変身」の原因を「なぜか」と問いかけ、中島文学の研究者間でもしばしば論議的となってきた。教材であれ研究対象であれ、「山月記」をめぐ

る言及の多くがこの二点に集中しているが、他方、そこに集中しがちな議論を規範化したシエマとして疑問視し、「語り論」等を軸とする新たな分析も試みられている^(注4)。とはいえ、「山月記」において上記二点を全く不問に付すことは、テキスト自体の意味や問いかけに眼をつぶり、作品世界の核心を回避することだと思われる。そのような〈読み〉には「何處か(非常に微妙な點に於て) 缺ける所がある」といってもよい。上記二点は、いわば「山月記」自体が抱える魅惑的なブラックボックスであり、それこそが今日まで読者の関心を喚起し続けた牽引力でもあって、古くとも新しい肝要な問題だといってもよい。

2. 教室の中の「山月記」

前出・佐野氏は「終章／問題解決の糸口」冒頭で次のように述べる。

「山月記」が「古譚」から切り離され、そのまま教室で読まれ続けているのは、「古譚」の枠組みではなく、「山月記」の枠組みで読むことが、教師の期待にかなうからではないのか、と。その期待は、「読解」や「人間性」の追究にあったことを「山月記」の受容を追うことで突きとめた。国民教材「山月記」は、その開かれたテキストを、教師や社会の期待に沿って読むことで誕生したのだった。

「読解」や「人間性」の追究は主題到達型の指導によって行われ、その主題内容である「お説教」は資本主義の精神と親和関係にあることを三・四章で指摘した。「山月記」の授業は、学習者の心の中に資本主義を支えるエートスを作り出し、日本の高度経済成長を精神面で後押ししてきたのであった。狭い意味での「読解」は、教室内での優位性を確保しようとする教師の心性と経済界が要請する学力説や大学入試を背景に確固とした牙城を築いたのだった。

むろん「山月記」は「古譚」と題する四編のうちの一編である^(注5)。「山月記」を単独に切り離すのではなく、「古譚」の一環と見直すことで、「人間性」追究型の読解の呪縛を断ち切ろうとする佐野氏の主張もわからなくはない。しかし、教材としては「古譚」四編が掲出されているわけではなく、生徒たちは「山月記」一編のみと向き合っている。したがって、教科書外の『山月記』の枠組みで読むのは、「教師の期待にかなうから」というよりは、「学習の手引き」などを含めた〈教科書〉自体の〈編集指針〉によるところが大きい。問題は、『山月記』の枠組

みて読む」ことではなく、従来の読解の「枠組み」(マンネリ)に安住し、そこから脱する新たな読みに挑むモチベーションの欠如ではなからうか。教室における教材の読解が少なからず「教師や社会の期待に沿」いがちなのは氏の述べる通りだし、「お説教」的読解が「資本主義の精神と親和関係」にあり「学習者の心の中に資本主義を支えるエートスを作り出し、日本の高度経済成長を精神面で後押ししてきた」ことも理解できる。しかし、それは「山月記」の読解だけに限られた問題なのではなく、公教育制度や学校制度をとりまく教育環境全般の問題であるだろう。

しかし、「山月記」をはさんで教師と生徒が教室で〈対話〉するにあたり、〈なぜ虎に変身したのか〉と〈微妙に欠ける所〉という二点の問題を回避するとしたら、「山月記」の教材自体としての魅力や焦点はかなりぼやけてしまう。むしろ、「学習の手引き」や設問による「課題学習」が〈正解誘導型〉の「伝達＝講義」方式による押し付けの要素をはらみ、生徒の自発的な読みを抑圧する一種の効率主義だという批判もわからないではない。それゆえ生徒の主體的な読みを重視した対話型の授業によって特定の〈正解〉主義を避けようという趣旨もわかる。しかし、共通の教材を前にして〈同じ場〉に集う生徒と教師が「対話」を重ねて一定の〈共通理解〉をめざすのでなければ、「教育現場」(教室)自体の存在理由も雲散霧消してしまう。あるいは、せめて共通理解の〈たたき台〉なりとも提示するのでなければ「教育現場」における〈教師〉の存在理由もまた希薄になってしまう。重要なのは〈共通理解〉を〈ゴール〉と考えるのではなく、〈スタート〉に位置づけるということだろう。

佐野氏は同書の終章で「教育を対話的な相互作用から生じる動的な営み」と位置づけ、その「実践的な取り組み」として次のような「例」をあげている。

「山月記」をきっかけにして「古譚」へと読みを繋いでみたらどうだろうか。「古譚」としての枠組みで読むことで、悲劇性や人間性の物語に回収されない読み方ができる。その上、「古譚」四編は「文字禍」をはじめとして、ことばの問題を考える恰好の教材となる。(中略)／この後、文字や言語をテーマに「山月記」を読み直すこともできるだろうし、学習者の興味に沿って文字や言語に関する他の教材を探すこともできる。

むしろこうした取り組みの意義を否定するつもりはない。だが、『古譚』へと読みを繋いでゆくには生徒が目の教材「山月記」をまずしっかりと読めるという前提が必要になる。しか

も、そうした「繋」ぎのためには配当時間を超える相当な時間が必要だろう。一方、教育現場がいわゆる特進クラスと普通クラスとに二極分解しつつある今日、後者においてはそうした前提を満たすこと自体が困難である。また、授業開始直後から机上にバタバタと突っ伏してゆく生徒たちの多い高校では、ごく短い教材一編を仕上げるだけでも相当な働きかけが求められる。それゆえ、教科書にない「他の教材」にまで話題を広げるのはほぼ絶望的だといってよい。

思うに「教育現場」はあらゆる意味で常に〈生身〉のものだ。その日、その時の現場は常に個別的であり、流動的であり、不測の事態に満ちみちている。昨日の生徒は今日の彼らではないし、教師たちも先刻と同じ人間ではない。しかも、学校間の格差は大きく、教室の空気にも天と地の差がある。それゆえ、いかなる「理論」をもってしても、かくあるべしという「理想」志向型のマニュアルを実践するのは困難である。現に、佐野氏が同じ終章の「問題解決の糸口」で示した〈あるべき道〉はきわめて抽象的なもので、それまでの具体的な論述や分析とは別の様相になっている。佐野本を貶めて言うのではなく（非常に有益で示唆に富む一冊である）、教育実践は技術的な成果を実例として語ることはできても、また、それを参考にすることは可能でも、同じ手法が別の場所（教室）で通用するかとなるときわめて難しい。つまり、教育実践を定型的な〈あるべき〉方式として提示することや多様な現場に全て適合するオールマイティな〈理論〉など、ほぼ不可能に近いと思われる。

3. 教室のなかの教師

教師の会合う「教育の現場」は常に一回性である。昨日の成功は今日の成功を保証しないし、A教室でうまくいった授業実践が隣のB教室でうまくゆくとも限らない。教師と生徒はともに〈素手〉で向き合い、その中で「現場」は生成される。つまり、あらかじめ定まったマニュアルもなく「教育現場」に立つしかない教師は、〈個〉としての自己と向き合いつつ生徒たちとの関係性のなかに我が身をさらすしかない。したがって、「教育現場」における実践の問題は、技術の巧拙は多少あるにしても、結局は教師個々のマインド（心掛け）やモチベーションに帰するしかないだろう。

第一に重要なことは、教師が不可避免的に〈抑圧的存在〉だという事実を認識することだと思われる。巨視的には国家が統括する「教育制度」のもと、学校という空間の中で、微視的には「教室」という〈ハコ〉の内部に生徒を囲い、教師という「職制」を遂行しようとするれば、すべての教師は否応なく〈抑圧的存在〉となる。「教育現場」の第一歩は、まずは自身の内なる

〈抑圧性〉を認識し、できるかぎりそれを抑制する姿勢をもって生徒との対話の場に立つことから始まる。このマインドの重要性に比べれば、授業内容や授業展開の工夫などはむしろ二次的な問題である。授業の形式や内容以前に、教師個々がそのマインドを肝に命じて授業に向かっているかを自身に問いかけること、これしかない。

第二に、〈開かれた授業〉とか〈生徒との対話重視〉というかたちの「教育現場」の実践報告は、ほとんどが私（教師）がこのように〈良い〉授業実践をしたという成果の報告である。そうした成果を報告する教師の心底には、無意識かつ不可避免的に「教育現場＝教室」を「作る」のはこの「私（教師）」だという意識が潜んでいる。だが、「教育現場」は「教師が作る」のではなく「生徒が作る」ものだ。多くの実践報告が、教師の主体性や授業改善の成果を語る時、自身が「教育現場」を「作る」主体であるかのような意識にとらわれているのではなかろうか。重要なのは、「教育現場」を「作る」のはあくまでも「生徒たち」であり、教師はその〈補完的存在〉であるということを常に自身に言い聞かせることだろう。

繰り返せば、「教育現場」を作る主体は「生徒」であり、「教師」はあくまでも〈補完的存在〉にすぎない。とはいえ、実際の教室では、共通の教材を前にして同じ場に臨む生徒と教師が「対話」を重ね、何らかの〈共通理解〉もしくはその〈たたき台〉を提示する必要がある。でなければ「教育現場」や教師の存在理由も無に等しい。「共通理解」ないし〈たたき台〉の提示が、たとえ〈抑圧性〉の兆しだとしても、それを自覚しつつ実際の教室ではその提示を避けることはできない。

それゆえ、私の場合、特に文学テキストが教材である場合、以下のような方策を選択してきた。すなわち、「共通解」と「個別解」という〈ダブル・スタンダード〉による授業を実践し、その後のテストにおいても同様のかたちで採点を行った（これについてはいずれ授業実践的な観点からより詳細に論じたいと考えている）。「共通解」とは生徒との〈対話〉を重ねつつ教師が提示する〈たたき台〉を軸とする合意形成から導かれた解答、「個別解」とは生徒個々の感性や経験に応じて教材から主体的に読みとった解答を意味する。後者については、あまり「共通解」とはならず、テキストと生徒個人との関係を基軸とするコメントをできるだけ採り上げるようにした。こうした授業実践がはたして良かったのか悪かったのかは、にわかに判断はできない。いずれにせよ、その評価はかつての「生徒」たち自身がその後の長い人生の中で判断するものだろうから。

授業方式の良し悪しや授業効果についてはここでこれ以上述べることはできない。だが、前

述したように、実際の教室においては〈抑圧〉的要素を自覚しつつも教師として「共通理解」に通じる〈たたき台〉、すなわち教師サイドの〈読み〉を提示せざるを得ないと考える。それゆえ、以下では上記二点の問題も含めた「山月記」に関する私見を述べ、従来読みとはやや異なる〈たたき台〉を提示してみたいと思う。

4. 虎への変身

「山月記」は、以下のような物語である。

「博学才穎」の李徴は若くして「江南尉に補せられたが」「性、狷介、自ら待む所頗る厚く」、「賤吏に甘んずるを潔しと」せず「官を退」き「人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽」り「詩家として名を死後百年に遺さうとした」が、「文名は容易に揚らず、生活は日を遂うて苦しくなる。数年後、「貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して」「一地方官吏の職を奉ずることになったが」、「之は、己の詩業に半ば絶望したため」でもあった。往年の俊才の「自尊心」は「傷つ」き、「狂悖の性は愈々抑へ難くな」り、如水のほとりで「遂に發狂し」、「闇の中へ駈け出した」李徴の行方を知るものはなかった。

翌年、李徴の旧友哀僂が勅命を奉じて嶺南の地に赴いた際、草むらの中から突然飛び出した虎に襲われ、危うく難を逃れると、草むらの中から「あぶない所だつた」と呟く人間の声が聞こえる。旧友李徴の声だと知った哀僂が語りかけ、その間の経緯を尋ねると李徴は答える。その後は冒頭近くにも記したように、李徴は最後の「頼」みとして、「産を破り心を狂はせて迄」「執着した」詩作のうち「今も尚記誦せる」詩編を「一部なりとも後代に傳へ」たいと申し出る。哀僂は旧友の願いを容れ、部下に詩編を書き取らせるが、その詩編に「何虚か（非常に微妙な点に於て）缺ける所があるのではないか」という感懐をもらす。その後、李徴は妻子の面倒を頼むが、すぐに「自嘲的な調子に戻つて」妻子の行く末よりも「己の乏しい詩業の方」を「氣にかける」ような男だから「こんな獣に身を墮すのだ」と語り、哀僂に帰路はこの道を通るようにと行って姿を消す。

こうしたストーリーを極限までシンプルにすると、早く白井吉見^(註6)が述べたように「『人間』が『虎』になる物語」である。現実にはあり得ない変身譚の「山月記」をリアリティのある世界として論じようとするれば、なぜ李徴が虎に変身したかの原因をまずは語らざるを得ない。それは「学習の手引き」などでも同様で、教材上の問題としても注意を促すべきポイントとなる。もっとも、この問題は、以下のように文脈をたどれば、テキスト自体から比較的〈揺

れ)の少ない解答を導き出すことができるだろう。

まず、作中に次の一節がある。

〔虎への変身が〕どうしても夢ではないと悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分からぬ。全く我々には判らぬ。【A】

李徴は突然襲った予期せぬ不運を「何故こんな事になつたのだらう」自問する。しかし、あれこれ考えても原因は「分らぬ(判らぬ)」とひとまず結論する。「山月記」をめぐる先行諸説は、こうした李徴の苦悩に寄り添いつつ、彼がなぜ虎に変身したかの理由をさまざまに解釈し、なかには主人公自身にも「分らぬ」ことを無理に詮索しても無駄だとする見解さえ出された。しかし、この引用【A】には次の一節が明確に対応している。

何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば思ひ當ることが全然ないでもない。【B】

虎に変身する「運命」が「何故」自分にふりかかったか「判らぬ」と「先刻は言つた」とある以上、この一節は明らかに引用【A】を受ける文脈である。また、続く一文で、李徴みずから、「考へやうに依れば、思ひ當ること」が「ないでもない」と述べる以上、これに続く述懐のうちに一応「思ひ當る」原因があるとみてよかろう。李徴は「詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたり」しなかつたことや、「俗物の間に伍することも潔しとしなかつた」ことの原因について、以下のように述べる。

共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心の所為である。(中略)己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慚恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。【C】

前半の「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」の二つの要因が、後半では「内なる臆病な自尊心」に絞られるという微妙なズレはあるものの、ひとまずそれが李徴を虎に変身させる〈引き金〉

になったと考えてよかろう。この引用【C】の末尾に「飼ひふとらせる」という表現があるのは、それに続く一節に〈動物〉の比喩が用いられることを暗示している。実際、続く一節には次のように「猛獣」すなわち「虎」が登場する。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に當るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。【D】

すでに明らかだろう。この間の文脈の流れに曲折するところがない以上、李徴を「猛獣」すなわち「虎」に変身させたのは、彼自身の「性情」、いうなれば彼の人間性を形成する性格や心情の底に根を張った「尊大な羞恥心」が原因であり、その肥大化した姿が「虎」だといってよかろう。ただし、末尾近くの「飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を墮すのだ」の一節に注目し、虎への変身の原因を「性情」すなわち「尊大な羞恥心」とすることに異を唱える説^(注7)もある。だが、何にもまして「己の乏しい詩業」を〈優先〉すること、すなわち彼の「詩業」に対する執着そのものが李徴の「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」のあらわれでもある^(注8)。つまり、教材としての「山月記」から導く公約数的な「共通解」でいえば、人一倍プライドが高くせに傷つきやすく（臆病な自尊心）、決して他人には知られたくないナイーブな気弱さ（尊大な羞恥心）など、そうした「性情」の肥大が李徴を「虎」に変身させた原因だといってよい。

ここで余談を一つ付け加えておきたい。それは人間の「性情」を「虎」にたとえる比喩に類似した表現の先例があるということだ。森鷗外の半自伝的な作品「キタ・セクスアリス」（明42・7）の一節がそれで、末尾部分に次のような述懐がある。

世間の人は性欲の虎を放し飼にして、どうかすると、其背に騎つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性欲の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅といふのがある。馴れた虎を傍に寝かして置いてゐる。童子がその虎を怖れてゐる。Bhadra とは賢者の義である。あの虎は性欲の象徴かも知れない。只馴らしてある丈で、虎の怖るべき威は衰へてゐないのである。

「性情」と「性欲」の違いはあるものの、その「怖るべき威」力を「虎」にたとえ、それが

人間を「滅亡の谷に墜」とす要因とみる点で、両作は共通している。もっとも、「山月記」が唐の李景亮撰「人虎伝」を典拠とし、人間が「虎」に変身するという事象も原典中に書かれているから、「キタ」が典拠だなどと強弁するつもりはない。ただ、昭和八（1923）年三月、東京帝国大学国文学科を卒業した中島の卒業論文「耽美派の研究」が、前説に続く第二章を「森鷗外・上田敏・及び詩に於ける耽美類唐派」と題し、その第二章冒頭が「一 森鷗外に現れたる、でいれったんていずむに就いて」であった。その一節で中島は「人生及藝術に於けるあらゆる傾向を理解し、人生が與へるすべての良き果實を自分の中に取り入れて、自分の内生命を豊富にしようといふ生活態度をもつ人」が「良い意味」のディレクタントだと述べる。その筆頭に鷗外の名をあげ、「青年」の純一の記事中にその萌芽を、短編「あそび」の木村の態度に「最も聡明なディレクタント」の姿を見だし、「キタ」や「魔睡」に「通俗倫理」を「超越」したディレクタントの本質を見ている。

翌月大学院に入学した際の研究課題が「森鷗外の研究」だったことも併せ考えると、中島の鷗外に対する親炙や関心はきわめて濃密だったことが窺える。たとえば、「虎を馴らして抑へてゐる」のが「キタ」の主人公金井湛であり、「虎を放し飼にして」「滅亡の谷に墜ち」たのが李徴だとみれば、両作はコインの裏表だともいえる。奇抜な変身譚の「人虎伝」に対する中島の関心が何によって触発され、この古い奇譚をどのような契機によって近代小説の世界に変奏してみようと思ったのか、などと考えると、そこに鷗外の「キタ」における「性欲」の「虎」が介在した可能性も想像してみたくなる。

5. 何處か（非常に微妙な点に於て）缺ける所

「山月記」をめぐる、従来から論議の対象となるもう一つの問題は次の場面である。「産を破り心を狂わせて迄自分が生涯執着した」詩を「一部なりとも後代に傳へ」たいとする李徴の願いを旧友の哀彦は聞き入れる。これに続く以下の箇所は、冒頭近くでも引いたが、論の展開上、再掲しておく。

哀彦は部下に命じ、筆を執つて叢中の聲に随つて書きとらせた。（中略）長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一議して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、哀彦は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることに違ひはない。しかし、この俣では、第一流の作品となるのには、何處か（非

常に微妙な點に於て) 缺ける所があるのではないか、と。【E】

この箇所に関連して、佐野氏の引いた増淵氏の実践報告が『『微妙な点』とは、たとえばどんなことか』という課題(設問)を生徒に与え、「人間性の欠如」を解答例として導く授業実践があったことは先に見た通りである。そうした流れは今日の「学習の手引き」や指導書の解説等でも基本的には変わらない。一方、中島文学研究者の間では「山月記」を論じながらこの「缺ける所」を正面から取り上げる例が意外に少ない。なかでは鷺只雄氏^(註9)の『『山月記』私見——『欠ける所』他をめぐって』が従来の諸説を整理しながら、問題の「缺ける所」を取り上げている。鷺氏は、「山月記」が高校国語教科書に「いわば古典」として採られ、問題の箇所が「〈学習の課題〉」の「設問」となったところに「論議」の発端を見、その「要点」を次のように列記している(筆者なりに要約)。

- (一) 教科書の指導書類では「人間性の欠如」や「愛の欠如」とみなしている。
- (二) 関良一(『ギリシア的叙情詩』と『山月記』について)「言語と文芸」42、昭40・9)はこれを批判し「作品に書いてないのだから、わからない」、「書いてないことを読み取ろうとすることは危険」とした上で「(強いて言えば)」「詩に没入する、詩人になり切る、そういうところが欠けている」とするのが「正解になる」とする。
- (三) 木村一信氏(『何処か(非常に微妙な点に於て) 欠ける所』管見)初出略、『中島敦論』昭61・2、双文社出版)は、関氏らの言説が「作品そのものに即した次元での正しさ」はあるものの「もの足りなさを感じる」として「哀憐が、どこも指示はできなくとも李徴の『詩』に『欠ける所』を感じとった」ことが「重要」だとし、そこに中島の「自己の文学における何らかの『乏しさ』」すなわち「中島の自ら『執着』する文学へのあくなき〈自己批評〉」を見る。
- (四) 勝又浩氏(『spirit 中島敦』昭59・7)は、それを「貧窮に堪へず、妻子の衣食のために遂に節を屈して」働きに出た「気の弱さ、信念の弱さ」であるとし、「本当は詩の鬼」にならなければならなかったのだとしている。

鷺氏はこれら四者に具体的な反論を示した上で、以下のような自説を展開している。まずは哀憐の李徴詩に対する「格調高雅、意趣卓逸、一讀して作者の才の非凡を思わせるものばかり」

という「感嘆」に注目し、「これ程の絶賛にあたいする非凡の才能をもった詩人がどうして有名にならなかったのだろうか」と「疑問」を呈し、「それに対して作品は何も答えてはいない」ところに「大きな問題」があり、それは「矛盾の同時存在」だとして、以下のように述べる。

虎と化した主人公の才能が二流以下であっては読者の共感は得られない。それが悲劇の主人公であるためにはあくまで才は一流、非凡な詩才に恵まれていたことは必須の条件である。／ところが（中略）それ程の非凡の才能が何故世に認められなかったのかというわけで、一流であると同時に欠点がなければ辻褃が合わない。／この矛盾の同時存在をどう解決するか、（中略）この解決をめぐる提出されたのが「欠ける所」だったというのが私の考えである。／作者が、才能は「非凡」であり「第一流」と言っている以上、どこもハッキリ指摘できるような欠陥ではあり得ない、あるいはあってはならない筈だ。従ってそれは可能な限り漠然としたものである必要がある。そういう苦心の成果が「欠ける所」であり、この表現（カツコつきの注釈を含めた…筆者注）に如実に現れていると思う。

鷺氏は、この「欠ける所」の背景に芥川が「文芸的な、余りに文芸的な」の「十三 森先生」で鷗外作品に対する「何か微妙なものを失つてゐる」がヒントとなったのではとも付け加えている。

鷺氏の指摘は作品の急所を穿つ見解で興味深いが、反面、氏のいう「矛盾の同時存在」とは、裏を返せば、作者による〈構想の失敗〉だとも取られかねぬ危うさを孕んでおり、これも決定的な解釈とは言い難い。それゆえ私たちは再びテキストの現場に立ち戻らざるを得ない。

問題の箇所を再読してみよう。哀儻は李徴が「朗々」と読み上げる「長短三十篇」の詩を聞き、「格調高雅、意趣卓逸、一讀して作者の才の非凡を思わせるものばかり」と「感嘆」しながらも「漠然」と「次の様」な感想を抱く。「成程、作者の素質が第一流に属するものであることに違ひはない。しかし、この俣では、第一流の作品となるのには、何處か（非常に微妙な點に於て）欠ける所があるのではないか」と。この述懐を微細に読み返してみると、哀儻は「第一流」の「作者の素質」と「第一流」の「作品」とを分けて考えていることがわかる。つまり、「第一流」の詩的「素質」をもつ人間が必ずしも「第一流」の「作品（詩）」を書けるわけではない、と。一方、哀儻が李徴の詩に「才の非凡」を認めた根拠は「格調高雅、意趣卓逸」

であるが、この種の褒辞は漢詩を評するための定形的な形容だったとは言えまいか。つまり、衷僂が李徴の詩に認める「非凡の才」とは、あくまでも漢詩世界の規範に準拠する要件を十分に満たしているという意味の高い評価、すなわち漢詩特有の詩学に照らせば「第一流」であるといった観点からの称賛だったのではあるまいか。そもそも衷僂その人が「詩」に秀でた深い造詣をもつ人物とは設定されておらず、彼の漢詩に対する鑑識眼も「進士」の一般的な素養以上のものではなかったろう。とすれば、「何處か（非常に微妙な點に於て）缺ける所」といった曖昧な表現も、単に「温和な」性格の秀才だった衷僂らしい評言だったわけで、詩への特別な感情や造詣を抱かぬ人物ゆえの漠とした直感そのままの発言だったといえよう。しかし、衷僂の素人らしい直感が感知した漠然たる感懐は、それだけにかえて「詩人」を熱望する李徴には見えなかった「作品（詩）」の本質を無意識に言い当てていたのである。いかに「非凡の才」や「第一級」の「素質」をもっていたにしても、「第一流」の「作品」を創造するには「詩」の規範を突き破る「詩」ならざる「微妙な」要素が不可欠であるということ、たとえるなら天啓のような得体の知れない閃きに身を委ねる一瞬、それが李徴の詩に「缺ける所」だったのではあるまいか。「詩家として名を死後百年に遺さう」という欲望と「尊大な羞恥心」とがそうした「微妙な」一瞬を李徴の眼から見えなくしていたと考えられる。

6. 己はどうして以前、人間だったのか

ところで、多くの「山月記」論がほとんど注目してこなかった述懐がある。李徴がなぜ虎に変身したのかと自問し、いったんは「分らぬ（判らぬ）」とした結論が「日を経るに従つて」微妙に変化していった事実を語った場面である。

その、人間にかへる數時間も、日を経るに従つて次第に短くなつて行く。今迄は、どうして虎などになつたかと怪しんでゐたのに、此の間ひよいと氣が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考へてゐた。之は恐いことだ。【E】

「人間にかへる」時間が次第に短くなってゆく過程で、李徴の自問は〈人間である自分がなぜ「虎などになつたか」〉から〈自分がなぜ「人間だったのか」〉へと変化し、後者を「考へる」方が「恐いことだ」と述べる。つまり、「以前」の自分がなぜ「虎」ではなく「人間」であったのか、それを「考へる」ことなく生きてきた事実の方が実ははるかに「恐いことだ」、と。

この自問の〈転換〉は単なる言葉のあやではない。それは私たちが「人間である」こと自体にどれほどの根拠があるかを問い直すことであって、自身の存立基盤を白紙に戻し、思考の原点を厳しく問い直す根底的な発問だからだ。ひとくちに言えば、私（人間）が「人間である」という自明性への懐疑である。言い換えれば、「人間である」ことを自明の前提とし、〈人間の枠組み〉を一步も出ずに形成された自意識などにはたしてどれほどの意味があるのか、と。「人間の心」をすべて失い、身も心も「虎」に変じたのちの「己」を想像し、李徴は次のように続ける。

今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了ふだらう。丁度、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するやうに。【F】

「虎」への変身が完了すれば「人間の心」も「獣としての習慣」の中に「すっかり埋れて消えて了ふ」。これを逆に言えば、私たち「人間の心」も実は人間としての「習慣」の中で形成されてきた仮象にすぎないのではないか。つまり、私たちは最初から「人間」として〈生まれた〉のではなく、〈何もの〉かとして生まれたのち、「人間」社会の「習慣」に馴致された結果、〈人間〉に化した存在にすぎない。だとすると、向き合うべき真の問題は、〈「人間」である自分がなぜ「虎」に変身したか〉ではなく、〈自分が「人間である」とはそもそもどういうことか〉であろう。現に、李徴も次のように続ける。

一體、獣でも人間でも、もとは何か他のものだつたんだらう。初めはそれを憶えてゐるが、次第に忘れて了ひ、初めから今の形のものだつたと思ひ込んでゐるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいゝ。己の中の人間の心がすっかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだらう。【G】

この述懐の前半が物語るのは、世の中の存在は、虎であれ人間であれ、「もと」はどちらでもない「何か他のもの」として生まれ、その後、様々な「習慣」に馴致されて虎や人間の〈形〉に分化した存在にすぎない、ということだ。それなのに、その「もと（起源）」を「忘れて了ひ」、自分が「初めから今の形のもの（人間）だつたと思ひ込んでゐる」にすぎない。いわば存在の原点を忘却していることこそ【E】に言う「恐しいこと」なのだ。後半の「己の中の人

間の心がすっかり消えて了へば」その方が「しあはせになれる」とは、そうした存在の原点を忘却したまま、自身の存在理由に固執するような厄介な問い、すなわち「人間」に縛られた自意識から解放されるということだろう。

ところで、やや唐突だが、〈人間と動物〉という観点から夏目漱石の「吾輩は猫である」を参照してみたい^(注10)。有名な冒頭の一行目は以下のように書き出されている。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

この一行がユーモラスに感じられるのは、おおむね次のような理由による。つまり、尊大な「人間」の自称である「吾輩」はと口火を切ったものの、その正体が実は「猫」だったという文脈の脱臼による。しかも、一行の述部にあたる「猫である」と言い切る強い断定は、「吾輩」が「人間である」はずだと自然に予測されがちな〈常識〉を揺るがしている。われわれの〈常識〉の根幹をなす〈人間優位〉の発想そのものに対する反語ともなっている。〔吾輩は〕「猫である」という確信に満ちた断定は、「吾輩=私」が「人間である」ことが本当なのかという疑いに反転し、ひいては「私はそもそもなぜ人間なのか」という問いをも導き出す。つまり「吾輩は猫である」という断言の強さは、「吾輩」なる存在が「人間である」という〈常識〉が必ずしも自明の理ではなく、「私とは何ものか」を問う場合には、何よりもまず「私」が「人間である」という前提自体を問い返す必要があるという根源的な命題へと導くことになる。重要なのは、「人間である私（吾輩）なる存在はなぜ猫なのか」ではなく「私はなぜ（猫ではなく）人間なのか」という反問の方である。

自分は「どうして虎などになつたのか」を自問するうちに不意に「己はどうして以前、人間だったのかと考へてゐた。之は恐しいことだ」とつぶやく李徴の述懐【E】は、自己の存在理由を問うには、何よりもまず「私」が「人間である」という前提自体を問い返さなければならない、ということを示唆している。たとえば、漱石作品の「猫」を「虎」に置き換えれば、「吾輩は虎である」となるが、これは「人間である私は人間ではない」と断言していることになり、その断言の強さはやがて「私はなぜ（虎ではなく）人間なのか」へと反転することになる。

存在論的にみれば、〈猫=虎〉も〈人間〉も本質的には等価だろう。われわれは最初から〈人間〉として「生まれた」のではなく、むしろ〈猫=虎〉とも〈人間〉ともつかぬ未分化の混沌たる〈塊〉として生まれ、それがいつしか人間社会の習慣に同化し、人間を指示する言語によっ

て分節化され、その結果、たまたま〈人間〉と呼ばれる存在となったにすぎない。これはそのまま李徴の言にも当てはまる。「獣でも人間でも、もとは何か他のものだった」という【G】の李徴の述懐は、われわれは最初から〈人間〉として「生まれた」のではなく、むしろ〈猫＝獣〉とも〈人間〉ともつかぬ未分化の混沌たる〈塊〉として「生まれ」、それがいつしか人間社会の習慣に同化し、たまたま〈人間〉と呼ばれる存在となったにすぎない、と。にもかかわらず、我々〈人間〉はそうした「もと(起源)」を「次第に忘れ」、「初めから今の形(人間)」だったと「思ひ込んでゐるのではないか？」と李徴は自問する。こうした内面に渦巻く本質的な問いかけを凝視しつつも、中島は李徴の口をかりて「いや、そんな事はどうでもいゝ」とあわてて否定する。「ひよいと気が付いて見たら」とか「そんな事はどうでもいゝ」といった、一見深刻さを打ち消すような文脈のせいか、この「恐いこと」に言及する先行文献はきわめて乏しい。しかし、この「恐いこと」を軸として、李徴がなぜ虎に変身したかを問い直せば、先の解釈とは別の新しい理由が浮上することになる。それは「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」など、いかにも〈人間らしい〉自意識に拘泥し続ける一方、人間が人間であることの自明性をついに疑わなかったこと、その実存的な問いかけの欠落こそが李徴を虎に変身させたもう一つの(あるいは真の)原因だったということになる。とはいえ、それは「山月記」の表の世界に浮上しきれないまま作品の深層を流れる地下水脈のモチーフにとどまった。事実、中島はそうした本質的な問いかけのとば口に立っただけで、それ以上踏み込もうとはしなかった。なぜなら、この存在論的課題を追究していったならば「山月記」という短編世界の規矩が破綻する恐れがあったし、自己のあからさまな精神の裸形を曝すことにも羞恥を覚えたからであろう。こうして見てくると、「山月記」の表向きのストーリーは「人間(私)が虎になる物語」ではあるものの、底流する影のモチーフは「吾輩は虎である」すなわち「人間である私は人間ではない」物語、つまりは「私はなぜ人間なのか」を問い返す物語への可能性を秘めた一編だったということになる。

【注】

(注1) 「随想・評論・小説教材一覧」(「国語教室」100号、2014・11、大修館)によると、平成25年度改定以後の国語教科書「国語総合」「現代文A」「現代文B」の全47種のうち、ただ1種を除く46種に「山月記」が採録されている。

(注2) 増淵恒吉「ことばと文学の教育Ⅱ(高等学校)文学作品における形象の問題——「山

月記」の取り扱い方について——」（「日本文学」昭31・11、日本文学協会編）のち増淵恒吉『国語科教材研究』（有精堂出版、昭51・4）に所収。

（注3）佐藤泉『国語教科書の戦後史』（勁草書房、平19・5）

（注4）小森陽一『くゆらぎ』の日本文学』（日本放送出版協会、平9・9）、勝又浩・山内洋編『中島敦『山月記』作品論集 近大文学作品論集成10』クレス出版、平13・10）などを参看した。

（注5）「山月記」は初め標題「古譚」のもと「文字禍」と共に発表されたが、原稿段階では他の二編「狐憑」「木乃伊」も含まれていたという。

（注6）「中島敦の文学」（「展望」昭23・12、筑摩書房）のち『人間と文学』（昭32・5、筑摩書房）所収。

（注7）佐々木充「山月記」（『中島敦の文学』昭48・6、桜楓社）は李徴が虎になった原因を「まぎれもなく彼が『己の詩業』を妻子の上に置いたが故」だとする。これには木村一信（『中島敦論』昭61・2、双文社出版）の異論や鷺只雄（注9）との間の論争などもある。

（注8）前出木村氏（注7）にも佐々木説（注7）に対する同趣旨の異論がある。

（注9）初出「言語と文芸」（昭63・9、桜楓社）のち『中島敦論「狼疾」の方法』（平2・5、有精堂）所収。

（注10）『吾輩は猫である』への言及については、越智治雄「猫の笑い、猫の狂気」（「解釈と鑑賞」昭45・6、至文堂）、前田愛「猫の言葉、猫の論理」（『作品論 夏目漱石』昭51・9、双文社出版）、浅野洋「小説家たちの起源Ⅱ 夏目漱石」（『小説の〈顔〉』平23・11、翰林書房）などを参看した。